【口絵10】奈良国立博物館 外観　特別展「第75回正倉院展」を目前に控えて準備が進む。

〈研修報告〉

令和5年度学芸員国内派遣研修報告
（奈良国立博物館）

菊　地　泰　子

この度、令和5年4月1日より1年間、独立行政法人国立文化財機構研修生として、奈良国立博物館【口絵10】において研修を受ける機会を得た。ここでは研修の内容と得られた成果について、その概要を報告する。ただし、本報告書の作成にあたり、都合上、4月から翌年1月末までの研修内容に関して言及するものとする。特段断りのない限り、掲載する画像は筆者の撮影による。

報告概要

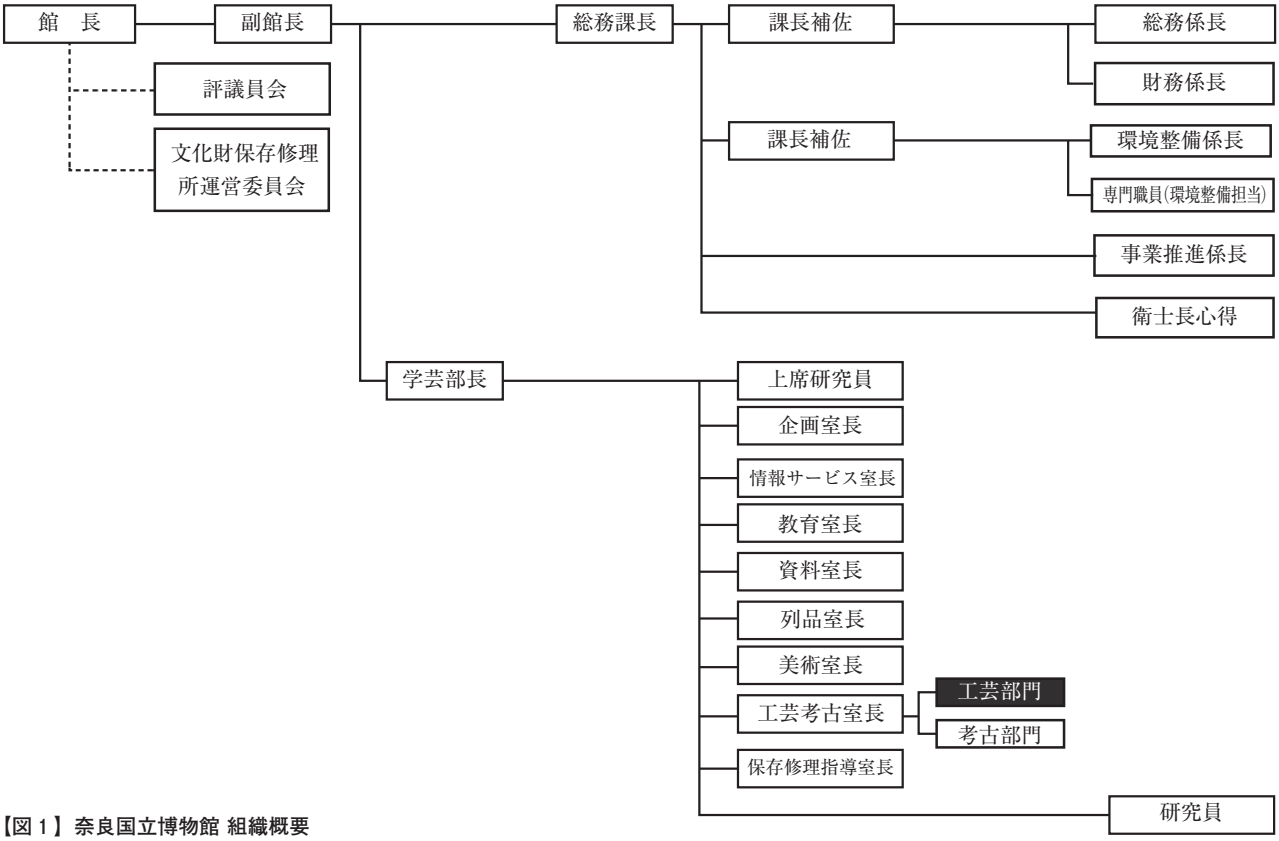
1研修テーマ　国立博物館の先進的なコレクション・マネジメントに関する諸活動・研究事例の調査
2研修期間　令和5年4月1日～令和6年3月31日
3研修概要
(1) 研修先の名称　奈良国立博物館
(2) 配属先の名称　工芸考古室 工芸部門【挿図1】
(3) 研修の内容

奈良国立博物館は、明治28（1895）年にわが国2番目の国立博物館として開館し、令和7（2025）年に130周年を迎える。仏教美術の研究拠点としても長い歴史を誇る奈良国立博物館に赴いて、学芸部工芸考古室工芸部門のもとで実際に作業にあたったほか、職員の方へのヒアリングや館内施設見学の機会をいただいた。現在、筆者が所属する美術館は大規模な改修工事を行っている。リニューアルオープンを果たすまで、既存の業務を見直し、新たな美術館活動の在り方について検討するべく、文化財の収集や保管、展覧事業や教育普及活動に関する最新の政策や動向、各種研究事例について、奈良国立博物館の実務に学ぶものである。

(4) 研修の成果

本研修の成果は、先述の研修内容に即して、①文化財の収集／寄贈・寄託の受入れ等、②文化財の管理・保存・修理等、③展覧事業、④教育普及活動の項目ごとに報告する。ただし、研修内容は一つひとつ実に様々であり、紙面の関係上、すべての研修内容について詳細に触れることができない。日々の具体的な業務に関しては末尾の「表 研修日程一覧」にリストアップすることとし、ここではいくつかの業務に的を絞る。

また、研修を積み重ねることで、筆者の所属する美術館の諸活動にどういった働きかけやフィード



【図１】奈良国立博物館 組織概要

注: 本図は、令和５年10月１日現在の独立行政法人国立文化財機構・本部事務局組織図（https://www.nich.go.jp/wp-content/uploads/2023/10/soshikizu_231001.pdf）を基に作成しているが、工芸考古室長に連なる各部門は、筆者の加筆による。

バックを行ったのかを、一部の成果を交えて簡単に述べたい。

①文化財の収集／寄贈・寄託の受入れ等

本研修では、受入れ先である工芸部門の三本周作主任研究員の指導のもとで、文化財の収集に関する諸業務をいくつか経験させていただいた。文化財の寄贈や寄託等のほかに、修理を行うにあたり、複数の手続きを経て、12 月下旬に「鑑査会」が執り行われた。当日までに絵画、彫刻、工芸、考古の各研究員は、候補に挙げた文化財について詳細な調書を作成し、部門の長と担当室長の承認を得る。調書の作成に際して、一通りの科学調査（蛍光エックス線調査・CT 分析調査）を光学調査室等で済ませ【挿図 2】、必要に応じて修理の段取りをつける。さらに文献の博捜を行ってもおり、調書は作品詳述に必要な情報が網羅的に記されている。特に「所見」と「受入れ理由」は調書に占める割合が大きい。鑑査会では、館長、副館長をはじめとして、各室の長と室員らを前にして、担当の研究員が調書に基づき文化財の概要を説明された。その後、質疑応答や実見の時間が設けられた。鑑査会を経たのち、後日、次の業務フローへ移っていく。

今回は事前に、主任研究員に同行する機会をいただき、寄贈・寄託の受入れ候補である文化財を調査する場に数回立ち会った。関係各所には調書に生かすことのできる情報提供を依頼され、寄贈や寄託を受入れる以前の早い段階で、今後の展示プランや保管方法を確立するにあたって必要となる知識

を共有いただいた。鑑査会までに、類例品の調査も欠かせない。関連性の高い文化財を見つけ出して、調書をより充実させることに念頭を置いた。

【図２】光学調査室 入口

②文化財の管理・保存・修理等

上述の収集活動に加えて、奈良国立博物館では文化財に適した保存環境整備を独自に進められてきており、温湿度・空気環境測定、定期清掃、トラップ回収、その他の防虫対策についての具体的な取り組み事例を保存修理指導室の方々からご教示いただいた。実感としては、ガス燻蒸や薬剤に頼らず、マンパワーと資金の最適なバランスを模索しつつ、文化財 IPM を継続していくことが肝要という印象を受けた。無暗にIPMの負担を増やすのではなく、全体の仕事が楽になることを第一に考えて、早めに問題の芽を摘んでいくという解決サイクルを回し続けていく必要がある。人手の限られた美術館においては、直ちに完璧にこなせるものではないが、IPM 会議（旧環境ワーキング）や虫菌害報告を通して、普段から問題を自分事として捉え、何らかの前兆があれば情報を共有して、一緒に考えていくことが可能となるよう、美術館総ぐるみでの協力体制の構築を地道に進めていきたい。このほかにもデータロガーや観測システムの運用を間近で拝見し、さらに収蔵庫や展示室内の環境維持方法、収蔵庫内の防災対策、修理修復に関する保存カルテの作成と管理方法等について、担当の方々に直接ヒアリングすることができた。

１月には、トラップ回収作業に立ち会い、２階から地下１階まで館内に設置されたトラップの回収を１時間ほどかけて経験する機会にも恵まれた【挿図3】。作業は単純なように見えるが、実際、手際

【図３】トラップ回収の様子　二手に分かれて要所に置かれたトラップを回収し、新しいものと交換する。

【図４】特別清掃　新館入口の防塵マットを交換し終え、古いものを台車で持ち去るところ。

よく館内を巡回する必要があり、かつ回収したトラップを専門業者に送付してからは、虫菌害の発生状況について、その報告書を見ながら分析を加え、館の構造や虫の活動、過去の報告も考え合わせて、館内の環境について判断していく。

学芸が直接関与する業務ではないが、一部、美術館の保存環境に寄与する可能性の高い事例について、次の通り紹介したい。特別展の開催にあたり、準備の一環として、玄関マットの交換が行われていた【挿図4】。目視した限り、使用されているマットは毛足の長いタイプで、外部からの汚れを室内に持ち込まないようにしていることがわかる。リニューアルオープン後の美術館は、従来よりも外部に通じる出入口が増えることから、上述の環境整備を通してマットの種類やその取り扱いについて、複数の選択肢を開拓することができた。

近年の課題として、文化財とその周辺の文書、写真、その他資料のデータベース化（以下、DBという。）も必須になっているが、美術館の本格的なDB構築は2022年以降始まったばかりであり、DB化を進めるにあたっての担当者の負担の大きさが如何ほどであるか、DBを構築するにあたって気を付ける問題点が何であるか、手探りの状態であった。文化財を受入れた時点での情報に加え、画像、出陳歴、修理歴（損傷地図）、新たな研究成果といった諸々の情報も一元管理する必要性を感じていたところ、宮崎幹子資料室長に効率的なDBの構築方法や、美術館の実情に即したDB化の進め方について具体的にご教示いただいた。このうち、画像申請手続きの外注案に関しては美術館内部で再検討がなされ、現在はより最適な手続きの準備を進めている。

DBの件が噴出する以前から、美術館の抱える問題は多岐にわたるが、とりわけ画像申請手続きと作品調書の整理は喫緊の課題と捉えていた。一連の問題に関しては、奈良国立博物館の写真室の実務

について、また調書の整理と館の方針について、詳しく伺うことができた。ヒアリングを重ねる中で、作品調書や損傷地図の電子化に関しても意識するようになった。ここから国立・私立美術館の動向や海外の国立博物館での取り組み事例にも調査の範囲を広げることができた。

③展覧事業

奈良国立博物館の展覧会は1特別展・特別陳列、2名品展の二つに大別される。このうち名品展では、なら仏像館【挿図5】において御像の特別公開を行い、青銅器館【挿図6】において中国の金工品を展示するほか、新館において「珠玉の仏教美術」と題し、絵画・書跡・考古・工芸の名品が分野別に展示されている。令和5年度の展覧事業は、春の名品展にはじまり、夏の特別展 聖地　南山城展【挿図7】や秋の特別展 正倉院展【挿図8】、そして冬の名品展や特別陳列 おん祭展、このほか特集展示等が組まれていた（表備考欄）。2月から3月にかけては、特別陳列 お水取り展を行う。

各展覧会に先駆けて、また貸出に際して、収蔵庫内で文化財のコンディション・チェックや展示方法について事前に検討がなされた。工芸部門には主席研究員が2名、研究員が1名在籍されている。複数の目を通して様々な角度から、輸送や展示にあたっての懸念事項が話し合われるほか、文化財に関する最新の知見や研究成果についても情報交換を行っていた。多数の研究員が一つの部門に所属することにより、一度に膨大な量の業務をやり繰りされ、事業全体を迅速かつ円滑に進めていく点が強く意識された。

【図5】なら仏像館 外観　明治27年に完成した、奈良で最初の本格的西洋建築。昭和44年に「旧帝国奈良博物館本館」として重要文化財に指定され、平成22年に「なら仏像館」と名称を変えて、仏像専門の展示施設としてスタートを切る。平成28年には内部を改装し、リニューアルオープンを果たす。国宝・重要文化財を含む、常時100体近くの仏像を展示する国内随一の展示施設。

【図６】青銅器館 外観　昭和12年、奈良国立博物館の収蔵庫として建設された。平成14年に内部を改装し、名品展「中国古代青銅器（坂本コレクション）」の展示施設としてオープン。

【図７】特別展「聖地　南山城展」新館入口

【図８】特別展「第75回正倉院展」新館 外観

展示・撤収作業では、展示補助台やキャプション立てといった展示演示具類を保管する備品庫に出入りし、それぞれの保管方法や分類方法を学ぶいい機会となった。展示室内では、文化財の展示はもとより、照明作業に立ち会うことができた【挿図９】。限られた時間で、作業を行う方に研究員の思い描く展示イメージを伝える必要があるため、具体的でわかりやすい指示の出し方を常に思考し、微細な違和感を見逃さないようにする。所属する美術館が比較的小規模な現場であるからこそ、作業時間に無駄が生じていないか、より安全で効率的な展示方法がないか、ここでは創意工夫のための検討材料をいくつも提供いただいた。

【図９】４月開幕の名品展照明作業の様子

【図10】文化財保存修理所 外観　国宝・重要文化財等の保存修理と、修理に伴う調査研究を目的とする施設。彫刻・絵画・書跡、漆工品などの修理技術者がこの施設で保存修理にあたる。平成14年オープン。

当館研究員の解説付き
於 当館講堂

普段は見ることのできない、
修理の現場を見学できる絶好の
機会です。

※修理所の見学は窓越しとなります。
修理所内での撮影は出来ません。

文化財保存修理所特別公開

令和6年1月11日(木)

第1回目　10:00～11:30
第2回目　13:00～14:30
第3回目　15:30～17:00
各回約90分

◆ 定員 各回 40名（抽選）
◆ 集合場所 奈良国立博物館・講堂

参加無料

講堂にて当館研究員（彫刻、絵画・書跡、工芸担当）による解説の後
修理所をご覧いただきます。
【解説：約60分　修理所へ移動：約10分　修理所見学：約20分】

■申込み方法
○ 奈良国立博物館ウェブサイト⇒「講座・催し物」⇒「催し物・イベント」
⇒「文化財保存修理所特別公開」の申込画面、または右記のＱＲコードより、必要事項を記入のうえ、お申し込みください。
○申込期間：2023年12月1日（金）～12月17日（日）まで
※12月22日(金)までに当選者のみに抽選結果をお知らせいたします。

QRコードから
申し込み可能

■お問合せ
〒630-8213　奈良市登大路町50
奈良国立博物館 総務課 事業推進係
TEL 0742-22-4450（平日9～12時、13～17時）
※駐車場は用意しておりませんので電車・バス等をご利用ください。
○近鉄奈良駅下車乗車へ徒歩約15分
○JR奈良駅または近鉄奈良駅から市内循環バス（外回り）「氷室神社・国立博物館」下車すぐ

奈良国立博物館
Nara National Museum
〒630-8213　奈良市登大路町50
TEL 0742-22-4450
ウェブサイト
https://www.narahaku.go.jp/

【図11】文化財保存修理所特別公開のお知らせ

【図12】仏教美術資料研究センター 外観　昭和55年に設置された施設で、仏教美術に関連する調査研究資料を扱い、関係する図書や写真等の公開を行う。毎週水曜・金曜は調査研究を目的とする一般の方も利用することができる。

④教育普及活動

奈良国立博物館の教育普及活動は、専用ホームページ「ならはく教育普及室」にて公開されている。子どもから大人まであらゆる人々へ開かれた学びの場をめざして、講座やボランティアガイド、各種催し物を随時更新している。また小中高生向けに専用の学校プログラム等を実施されてもいる。

本研修では、月１回開かれるサンデートークや聖地　南山城展会期中の夏季講座、ほかに正倉院展の見どころガイドを兼ねた講座等、聴講の機会に多く恵まれた。年が明けた１月には特集展示　新たに修理された文化財展に関連して、文化財保存修理所特別公開に立ち会った【挿図 10・11】。一年に一度、抽選で選ばれた約 120 名が普段は立ち入り禁止の修理所を見学することができる。当日は午前午後の計３回、彫刻、絵画・書跡、漆工ごとに研究員の方々が文化財の修理について写真を交えながら説明を行っていた。

特別公開にあたっては、保存修理指導室が中心となって日程や開催概要を協議し、修理所の方々と綿密な打ち合わせを行う。修理中の文化財が一般の人の目に触れることから、文化財所蔵者等関係各所に事前確認を行うことも不可欠である。研究員の方々は、修理所の見学時間を最大限利用して質疑応答の対応をされ、このことからも教育普及活動への力の入れようが感じられた。

公開の反響は参加者の反応をみれば一目瞭然で、上述の質疑応答を熱心になさる方もいれば、当日の見学対象ではないものの、隣接する仏教美術資料研究センター【挿図 12】について見学の有無を尋ねる方もいて、特別公開をきっかけとして、奈良国立博物館に強い関心を寄せていることがわかった。

(5) 研修成果の活用について

１年間の研修を通して、まず①文化財の収集／寄贈・寄託の受入れ等においては、鑑査会に一度立ち会ったに過ぎないが、事前の調査や類例品の探索を契機として、文化財が館に受入れられるまでの

過程を辿り、明確な指針を得ることができた。収集評価委員会を開催するにあたって、研修内容を生かした諸手続きの提案を行う予定である。

②文化財の管理・保存・修理等においては、今後の美術館活動に今すぐ貢献できるようなものとして、文化財 IPM をスムーズに回すための提言やインフラ整備が挙げられる。折しも、美術館はリニューアルオープンを目前に控えており、自問自答しながら定期清掃や燻蒸の在り方にメスを入れ、環境測定機器や防災対策用キットの吟味を行ってもきたが、ここにきて経験豊かな研究員の方々と交流し、物事を俯瞰的に眺めることで、新たに国立国際美術館や大英博物館という国内外の主要博物館施設にも調査対象を広げて、最新の業務を把握することができた。引き続き各機関とともに情報交換を含めた協力体制の強化を進めていきたい。

③展覧事業と④教育普及活動においては、よりよい展示方法や親しみやすい講座の実現に向けて、じっくり考えることのできる環境に身を置き、客観的に美術館活動を見つめ直す学びの時間を得た。また研修では、野田コレクションの整理が入口の段階までとなり、全容の把握には至らなかったが、貴重な研究資源として、大きな意味を持つ。

なにより１年間の研修を通して、幸いにも多くの方々の面識を得ることが叶い、自身の研究活動にとって大きな支えとなる。今回の研修成果を継続して美術館の諸活動に還元し、研修で深めた知見を有効に活用していきたい。

謝辞

本研修に際して、以下の皆様方に格別のご高配を賜りました。辞令交付にはじまり、折に触れて実務やヒアリングの機会を頂戴し感謝いたします。ここに御芳名を掲載することのできなかった方々も含め、研修でお世話になったすべての皆様方へ衷心より御礼申し上げます。（順不同・敬称略）

独立行政法人国立文化財機構　島谷弘幸理事長

奈良国立博物館　井上洋一館長

吉澤悟学芸部長　三本周作主任研究員　三田覚之主任研究員　伊藤旭人研究員

宮崎幹子資料室長　鳥越俊行保存修理指導室長　荒木臣紀上席研究員

小峰幸夫研究員　加藤沙弥研究員

表　研修日程一覧

	研修日	概要	備考
1	令和5 （2023）年 4月 5日	辞令交付 仏教美術資料研究センター等の館内施設見学 寄託品に関する業務の立会	研修初日
2	4月14日	工芸部門の収蔵庫見学	
3	4月20日	名品展展示作業・照明作業	
4	4月21日	名品展照明作業・最終調整 調査室見学	4月22日 名品展開幕
5	4月24日	文化財保存修理所見学	
6	4月25日	凸版印刷（株）文化財VRプレゼンテーション視聴 特別観覧対応	
7	4月26日	名品展関連の調整（パネル作成等）	
8	5月 1日	特別観覧対応 館蔵品の保存方法に関する打合同席	
9	5月10日	正倉院展関連の補助作業	
10	5月12日	正倉院展関連の補助作業	
11	5月15日	南山城展図録掲載作品の撮影	
12	5月18日	寄託品 蛍光エックス線調査	
13	5月29日	館蔵品（野田コレクション）の調査（調書作成等）	6月4日 名品展閉幕
14	6月 5日	名品展撤収作業	
15	6月 7日	特別観覧対応	
16	6月 9日	南山城展図録の色校確認	
17	6月12日	返却対応・作品点検	
18	6月14日	特別観覧対応	
19	6月19日	館内資料調査	
20	6月21日	データベース構築に関するヒアリング	
21	6月30日	南山城展展示作業	
22	7月 3日	IPM・環境ワーキンググループ（WG）に関するヒアリング資料の作成	7月8日 南山城展開幕
23	7月10日	特別観覧対応 名品展に関する作品調査	
24	7月12日	IPM・環境WGに関するヒアリング 貸出予定作品の撮影	
25	7月18日	作品撮影	
26	7月19日	データベース構築に関するヒアリング	
27	7月26日	報道発表にかかる補助作業（会場設営等）	正倉院展報道発表
28	8月18日	正倉院展関連の補助作業	
29	8月21日	IPM（特に虫害）に関するヒアリング 特別展準備（展示室の測量等）	8月22日 夏季講座開催
30	8月23日	夏季講座拝聴 保存カルテに関するヒアリング	8月23日 夏季講座開催
31	8月28日	館内資料調査	
32	8月30日	南山城展特別講演の拝聴	9月3日 南山城展閉幕

	研修日	概要	備考
33	9月 6日	南山城展撤収作業	
34	9月29日	展示ケース移動の対応	
35	10月 5日	正倉院展関連の補助作業 貸出対応	
36	10月12日	正倉院展関連の補助作業	
37	10月23日	正倉院展展示作業の立会	
38	10月25日	正倉院展展示作業の立会	
39	10月26日	正倉院展展示作業・照明作業の立会	
40	10月27日	内覧会見学 点検作業の立会	10月28日正倉院展開幕
41	11月8日	正倉院展レクチャー拝聴	
42	11月13日	正倉院展レクチャー拝聴	正倉院展閉幕
43	11月14日	点検作業の立会	
44	11月17日	撤収作業の立会	
45	11月21日	造作会社等の撤収作業確認 温湿度計測・収蔵庫環境に関するヒアリング	
46	11月29日	返却対応 鑑査業務の打合同席	
47	12月 4日	特別陳列おん祭展、名品展展示作業	
48	12月 6日	特別陳列おん祭展、名品展照明作業・最終調整 作品撮影（赤外線）	12月9日 特別陳列、名品展開幕
49	12月19日	返却対応 IPM（特に燻蒸作業・トラップ回収）に関するヒアリング	特集展示開幕
50	12月20日	鑑査会（修理・寄贈・買取・寄託）	
51	12月22日	収蔵庫見学	館長年末挨拶・収蔵庫査察
52	12月25日	開館130周年記念に関する作品撮影 返却対応	1月1日 令和6年能登半島地震発生
53	令和6（2024）年1月 5日	文化財レスキューに関する情報収集	
54	1月11日	文化財保存修理所特別公開にかかる補助作業 開館130周年記念に関する作品撮影	文化財保存修理所特別公開
55	1月15日	特別陳列おん祭展、名品展撤収作業 漆工品 CT調査	1月 14 日 特別陳列、特集展示、名品展閉幕
56	1月16日	金工品 蛍光エックス線調査、CT調査	
57	1月17日	館内トラップ回収 IPM（特にトラップ回収と分析）に関するヒアリング	

注：本表は、特に注記のない限り、令和5（2023）年4月から令和6年（2024）1月までの一覧である。表の左端には通し番号を掲げた。概要欄は、当日立ち会った主要業務や行事に限って略記したもので、紙面の都合により実際の研修内容と完全に一致しない場合がある。備考欄は、研修と特に関連度の高い展覧事業や教育普及活動等を示した。